われわれにできることは何か。

富田玲子＋樋口裕康×古谷誠章

Reiko Tomita + Hiroyasu Higuchi ｜建築家｜ゲスト × Nobuaki Furuya｜建築家｜聞き手

丹下先生のところで代々木体育館のお仕事をされていた時に、貴賓室の内装のデザインを担当された——古谷

建築を志されたのは…

古谷｜今回は象設計集団の創設者であるおふたりにお伺いするわけですが、いつも最初は、そもそも建築家になろうとされた最初のきっかけは何だったのでしょうか、というご質問に決めているんです。

樋口｜僕は実は建築家になる意志は全くなくて、「早稲田の理工学部にいくなら建築科だろう」と言われて受けたんです。しかも60年安保があったりして学校にもあんまり行かなくてすんだ。でも、やっぱり吉阪（隆正）先生との出会いかな。4年の時だったと思うけど、吉阪先生に会って、建築をやってみようと思った。それで大学院の試験を受けて勉強を始めたんです。

古谷｜それは学部の4年生の時?

樋口｜そう。登山家・吉阪隆正の名前は知っていて、それで卒論の指導教授を吉阪先生にした。僕も山登りが好きだったからね。先生は僕らの4年間、ほとんど学校にはいなかった。卒論の頃も南米に行っていたし、会ったのは卒論発表の2日前。

古谷｜吉阪先生は当時、俗に年間200日は山に…、そういう噂がありましたけど、あの頃ですね。

樋口｜卒論の発表後、家に招かれて、お酒を飲みながらいろんな話をしてくれた。その時の「樋口君、建築は自由なんだよ。何をやってもいいんだよ」の言葉にひかれたのよ。そうか。びっくりして、ハッとして、建築の勉強をやり出した。大学院では吉阪研究室ではなく、今井（兼次）研究室。自由、気ままな雰囲気があったね。

古谷｜いわゆる大部屋ですね?

樋口｜その他大勢という大部屋（笑）。建築デザインというのは、雑誌を見たってつまらない世界でしょ。今でもそう思っているんだけど。大学院に入ってすぐに吉阪先生のゼミがあった。「有形学へのアプローチ」、『国際建築』に発表されたやつ。先輩の戸沼（幸市）さん、鈴木洵さんも一緒で、宇宙、人類の歴史、環境と造形、斜面などなど、建築には直接関係のない話ばっかりで、それはそれは、とっても面白かった。この時から、もう現代建築から遠ざかり出した気がするね。

古谷｜吉阪先生は、大学院では授業をされていたんですね。

樋口｜そうそう。もう一つは、ル・コルビュジエのモデュロールをやっていた。

古谷｜では、大部屋にいて吉阪先生の講義にだけ出ていらしたわけですね。大学院時代には、先生のお手伝いをするとか、そういうことは?

樋口｜手伝いはしなかった。僕はね、実は大学院に寝泊まりしていたんです。大部屋のテーブルがベッドにちょうどいいんだよね。そうするとデザイン以外の材料力学とか構造力学、都市計画、そういう先生が呼びに来るの。学生がいなくてさ、授業には2、3人しかいない。僕はその授業にみんな出ていたから人気者でね、とても可愛いがられた（笑）。

古谷｜樋口さんが大学にいらした頃というのは1960年代ですね?

樋口｜そうだね、59年ぐらいに入って、63年までかな。

古谷｜まだ大学紛争があるわけでもないから、もうちょっと穏やかな時ですよね。

樋口｜いや、60年安保があった。

古谷｜あ、60年安保の頃に入られた。大学院の時はもう…。

樋口｜そうね、63年卒業だからね。

古谷｜建築には、それまではあんまり興味はなかったっておっしゃいましたけど、大学に入る前は、どんなことをされていたんですか。何がお好きだったんですか?

樋口｜絵を描くことと登山。中学からやっていたけど、大学の時は100日ぐらい山にいて、100日ぐらいアルバイトして、100日ぐらい雀荘にいた。

古谷｜じゃあ1年が終わっちゃうじゃないですか（笑）。

樋口｜ただ、試験は全部受けた（笑）。試験さえ受ければ通る時代だった。だから試験勉強はしたよね。

古谷｜そうですか。今度は富田さんにお伺いします。富田さんは東大ですね。最初は数学科でしたか?

富田｜最初、理科Ⅱ類に入りました。理Ⅱだと大体の人が医学部、理学部、それから農学部かな。

古谷｜本当は何をされようと思って理Ⅱにいかれたんですか。

富田｜医学部に入ろうと思っていました（笑）。ところが入ってみてびっくりしたのは、いろんな試験の結果を壁に貼るんですね。それは上から何人までが医学部にいける…ということらしいのね。医学部にいきたい人は大学に入った途端にものすごく勉強していて、恐ろしいと思って、すぐにあきらめました。

古谷｜そもそも、何で医学部にいこうと思われたんですか?

富田｜私の父が医者だったんですが、第二次世界大戦で戦死したんです。それで何となく、その後を継がなきゃいけないという使命感みたいなものが子どもの時からあって、医学部と思ったんですね。でも、あきらめて、さて何をしようかと思った時に、父が建築もやりたかったと言っていたらしいということを思い出して、じゃあ建築にいこうかしらって。大体、建築学科があるかどうかも知らなかったんだけど、工学部にあることが分かって…。理Ⅱから工学部には10%入れるという制度があったんです。建築は40人なんですけど、理Ⅱから申し込んだ人が4人だったので、ちょうど良かったんです。

古谷｜じゃあ、すんなりと転科ができた。

樋口｜その頃は、建築科って人気なかったの?

富田｜なかったんじゃないかな。空いていたのよ（笑）。どんな先生がいらっしゃるかとか、何の知識もなかったんですけどね。

古谷｜でも最終的には丹下（健三）先生のところで勉強されている。

富田｜大学院ではね…。最初は吉武（泰水）研究室に入ったんですが、すぐに辞めて丹下研究室に…。

古谷｜何で辞めちゃうんですか。

富田｜大学院に入った途端に、ちょっと体を悪くしてひと月以上、入院したんですね。その間に吉武研究室にいった人が「今、こういうことをやっている」って、見舞いかたがたいろいろと資料を持ってきて下さった。それを見たら何だか数字ばっかり書いてあって、“調査・研究が中心”という感じがしたんですね。私は、すぐに設計をやりたいと思ったのね。それで退院して、吉武研究室にいかないで勝手に丹下研究室にいった…、みたいなところがあります（笑）。

古谷｜そうですか。僕は最初から丹下研究室にいらしたのかと思っていました。前に伺いましたが、丹下先生のところで代々木体育館のお仕事をされていた時に、貴賓室の内装のデザインを担当された。それがきっかけで、結局、丹下研究室も辞めることになったという話でしたね、たしか…。

富田｜そうなんです。虎の毛皮を床と壁と天井に張っちゃった、というのかな。まず大理石を全部張って、それだけだと冷たいから、半分ぐらいまで毛皮で覆ったらいいだろうと思ったんです（笑）。

古谷｜でも最後にはその案は採用されず、結局、その虎の毛皮がきっかけになって、それ以来あんまりいく気がしなくなった。相当ショックだったわけですね、採用されなかったのは…。

富田｜ショックというよりも、「もういいか!」という感じだったのかもしれません。

古谷｜それはまだ大学院生の頃ですね。

富田｜そう、大学院です。

古谷｜そこから吉阪先生のところにいかれるきっかけは、どういうものですか?

富田｜虎の毛皮なんかの案を見て「あなたは吉阪先生のところが向いている」と佐々木マリオさんという日系アルゼンチンの人に言われたんです。彼は吉阪先生がアルゼンチンに教えにいらしていた時の学生で、私をU研[1]に連れて行って下さった。

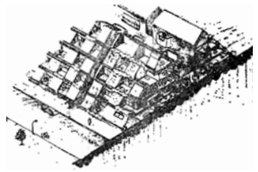
古谷｜吉阪先生のところにですか? いきなり佐々木さんに連れて来られた富田さんを見て、吉阪先生の反

虎の毛皮を床と壁と天井に張っちゃった、というのかな。まず大理石を全部張って、それだけだと冷たいから…——富田

［1］ U研究室
1954年に吉阪隆正を中心に大竹十一、滝沢健児らが参加して吉阪研究室が創設され、その後65年に早稲田大学では社会的設計活動を主とするU研究室が開設された［象設計集団］

[2]　大島元町に対する提案
1965年1月11日、伊豆大島元町をひとなめにした大火は、強風、水利の悪さなどにより約15ha、340戸を焼失させた。大火の翌日、吉阪隆正を中心とするDISCONTグループは、元町再建案を作成し、ただちに現地にとび、地元住民組織および、町、都関係者に提出した。これが吉阪研究室と伊豆大島の出会いとなり、以降1970年まで続く諸調査・計画のスタートとなった[出典:『吉阪隆正集12―地域のデザイン』吉阪隆正著[勁草書房/1985]]

[3]　山型建築
山型をしたひな壇状の人工土地。土地利用は自由。緑の中に新しいまちの機能と景観をつくり出す[参照:『吉阪隆正集12―地域のデザイン』]



応はいかがでしたか?

富田｜「場所がありませんな」って言われたんです。

樋口｜大竹(十一)さんもいたんだよね。要するに、女性は面倒だから入れないというのが彼らの意志だったからね。

富田｜皆さんいろいろ理由をつけて、敬遠している感じ…。確かにプレハブの事務所を見回したら満員だったんですけど、切妻天井の一番高い部分を指して、「あそこがありますね」って言ったら、「そうか、じゃあ仕方ないか」と言われたんです。

古谷｜それは富田さんが発見して言ったわけですね。

樋口｜そういう変なことを言うから入れてもらえたんじゃないかな。

富田｜「どうぞ」ということになって、そうしたらその日はアッサードパーティの日だったんです(笑)。

樋口｜アルゼンチンの焼き肉。1頭分とまではいかないけど、牛のこんな大きい肉を焼くんです。

富田｜玄関に置いておく、靴の泥を払う硬いネットありますよね。それを持ってきてお肉を置いて焼くんですが、ちょうど夕方にそのパーティをする日だった。「それに参加しなさい」と言われて…。お肉とサラダだけなんですけどね、お庭で。まぁ素晴らしいところに来た…と、その時に思いました(笑)。

古谷｜ここが居場所だと…。でも、それは最初に行った日で、翌日から働き出す感じですか?

富田｜そう。でも次の日に行っても、誰も「おはよう」も言ってくれない(笑)。

樋口｜そうそう、誰も、ものを言ってくれないんだよね。

富田｜顔も見ないでやっているんですよ、みんな。

古谷｜じゃあどうやって、その中から仕事があてがわれたんですか。

富田｜それでも何かやらせようと思われて、最初は何だったか、結局、建たなかった住宅をやりましたね。その時にびっくりしたのは、南側がほとんど壁で、小さな窓が開いているだけ、北が大きな窓になっていた。面白いところだなぁと、すごく興味を持ったんです(笑)。

古谷｜常識と違うな…と。樋口さんと会われるのはちょうどその頃ですか。

富田｜だいぶ後かな。

樋口｜僕は大学院の時、アルバイトでちょっといったり手伝いをしたりしていたから、入る1年前くらいには会っているのかな。

富田｜そう、時々来ていたわね。

樋口｜1962年か3年ぐらいには、もう出入りはしていた。東京オリンピックはあそこの居間で見たからね。先生がカラーテレビを買ったんだよね。

古谷｜オリンピックのために…。その当時はU研には何人ぐらいいましたか?

樋口｜12、3人ぐらいかな。人数は固定していなくて、延々と出たり入ったり、誰が所員なのか、誰がそうじゃないのかも分からない。

古谷｜ずっとそうでしたもんね、U研は。

樋口｜僕らが出るまでは少なくともずっと。増える時は30人ぐらいで、減る時は誰もいないとか。

古谷｜象をつくられる前だから、10年弱ぐらいはその状態?

富田｜私は63年の4月か5月に入って、71年の6月までだから、8年くらいはね。

U研での仕事

古谷｜おふたりともU研での間に主に担当された仕事は?

富田｜大学セミナーハウスの逆ピラミッドの本館は決まっていて、私は本館より南のちょっと下がったところにあるサービスセンターの、主にお風呂です。その中のタイルの模様。5色くらいのモザイクタイルを組み合わせた模様だけを、2ヵ月やっていたんです(笑)。

樋口｜富田さんは華麗で大きいお風呂をやっていた。僕はこんなチビいお風呂でね。

古谷｜そうすると、工事が始まっていた?

富田｜工事はまだだったかな。

樋口｜工事は始まっていないんじゃない? 僕は建つ前の桑畑の敷地を見ているから。

古谷｜今は違いますが、僕たちが早稲田に入った頃は、毎年、新入生のオリエンテーションをあそこでやっていました。まずあそこに連れて行かれて、ガンッと衝撃をくらうわけです(笑)。

樋口｜丹下先生も見に来てね、聞いた話だけど、たったひと言「吉阪君は山が好きだからな」と言って帰っちゃった。気に入らなかったんだね。バラバラに建っているでしょ。丹下さんだとまとめそうでしょう(笑)。

古谷｜そうですよね。でもやっぱり、僕たち1年生で予備知識がなくて連れて行かれましたけど、地形に一切、手を加えずに建てるとはこういうことだ、と一目瞭然に分かったような感じがしました。

樋口｜あの当時の設計方法は、後から分析するとすごく面白い。ベニヤ板のテーブルにA1ぐらいの紙が置いてあって、幾つかの同心円、その中心から放射線が引かれていて、それぞれに項目が書いてある。政治、経済、遊び、喜び、デザインなどなど。そこにそれぞれが自由に書き込む。

古谷｜言ってみれば、コンセプトですね。アイデアをそこに書き込む。それがある程度、書かれてくるとディスカッションする…とか。

富田｜そう、毎日ディスカッションしていました。

古谷｜先生も毎日、必ずいらっしゃる?

樋口｜先生は忙しいでしょ。だから先生が来た時は必ず捕まえて、先生も一生懸命時間をとって、ものすごいディスカッションをしてくれた。

古谷｜しかも、結構、夜遅くとか…(笑)。

富田｜そうなの。

古谷｜時間が普通の時間じゃないんですよね。それこそU研の人は夕方の5時頃に「これから出勤する」とか言っていたのを覚えています。どういう勤務時間なんだろうと思っていました(笑)。

樋口｜大竹さんが4時ぐらいに来て終電までいるというのが、サラリーマンみたいに決まっていた。先生は例によって不規則だけど、夜中まで酒を飲んだりして2時くらいにU研に帰って来るでしょ。僕らがいると、ちょっと話したり、酒を一緒に飲んだり。でもね、先生以外は誰も話をしてくれない。

古谷｜スタッフみんながですか?

樋口｜そう。ディスカッションはするんだよ。だけど本当に黙ってみんな何かしている。変な事務所だな、困ったもんだと思いながらさ(笑)。

古谷｜もっぱらその7年か8年間はセミナーハウス?

富田｜だけでもないです。赤星邸というコンクリートの住宅とか、調布の“かまぶろ”とかもやりました。

樋口｜セミナーハウスの長期研修棟とか、いろんなものをやっていたよね。

古谷｜樋口さんは?

樋口｜コンペはものすごくたくさん出した記憶があるけど、僕は大島計画[2]を始め、高田馬場再開発計画、住宅、山小屋、21世紀の日本…とか。

古谷｜大島計画は1965年でしたね。最初に行かれたのは樋口さんだったのですか?

樋口｜これも偶然なんだよね。大島が大火になるでしょ。その夜に、吉阪先生が「われわれができることは何か」を考えて、まちの復興計画のコンセプトと住居計画をA2の図面にして、朝、「誰か大島に持って行ってくれ」と言うからさ、僕と渡部一二君が手を挙げた。飛行機で行けるっていうのね、飛行機に乗ったことなかったし。ただ、僕は内心では今、大島で必要なのは、絶対、水とおにぎりだろうと思ったんだけど、先生は「われわれにできることは何か。復興計画だ。断固、持って行け」と言うわけですよ。やっぱりすごい人だなと思った。図面3枚を50部か100部か忘れたけど、コピーして2人で持って行った。それが始まりです。当然、誰にも相手にされないわけ。だけど、だいぶたってから、まちづくり復興委員会の人たちが吉阪先生を呼ぶわけですよ。そこから具体的な作業に入って、それで地井(昭夫)君、ジュニア(大竹康市)を中心として学生たちが大学の建築科のアトリエで作業して、その後、U研で産専(産業専修学校)の連中と大騒ぎをしながらやるんです。事務所でやっていたのは、水取り山計画、元町墓地保存計画、山型建築[3]など。水取り山の建設を呼びかけた名文[4]知ってる? 僕らは感動してね、大勢集まったわけよ。1965年かな、やっぱり人の生き方みたいな、環境に対する考え方が、若い連中をみんな引っ張っていた。

古谷｜いや、やっぱり吉阪先生の大島計画はいまだに早稲田では語り草ですよね。すごい経験でしたよね。

樋口｜そう、すごい経験。僕はしびれたよね。夜中に1人で描くんだもん。そしてその後、大勢人が集まってくる。すごい人だなと思いましたよね。

古谷｜吉阪先生を突き動かしたのは、「自分たちにしかできないことは何だ、自分ができることは何だ」ということですね。

象設計集団の誕生の頃

古谷｜だんだん経験を積まれて、いよいよ象設計集団をつくろうということになるわけですが、その辺のいきさつはどんな感じですか? 最初は、大竹康市さんと富田さんと樋口さん。重村(力)さんも入っていた?

富田｜重村さんと有村(桂子)さんはちょっと遅れるんだったかしら。

樋口｜いや、ほぼ同時ぐらいだね。

古谷｜きっかけになるのは…。

富田｜それぞれがそろそろ出たいという気持になっていたんですね。一緒にやろうなんて思わないでね。

樋口｜僕の場合は、ジュニアに「一緒にやろう」って、盛んに口説かれていたんだ。富田さんはそのちょっと後にね、自分で勝手に入ってきた。

古谷｜ここは面白そうだって。

樋口｜集団でやろうって気は全然なかったけど、やっぱりU研で何となく過ごした経験が大きくて、やるならああいう感じだろう…くらいには思っていたのかもね、何も話さなかったけど。個人個人で勝手にやりながら、みんなで一個をつくっていく…みたいなやり方ね。

古谷｜まさにそれが不連続統一体な感じですかね。

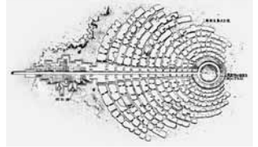
樋口｜そういう感じを何となく持っていて、一緒にやったんじゃないかな。あんまり考えないでつくったんだよ。

古谷｜もともとU研には一人ひとりの何かがあって、それが緩やかにまとまっているような感じがあったから、そこからある組織立ったものをつくり上げようというのではなく、その延長にあるというか…。

大島が大火になるでしょ。その夜に、吉阪先生が復興計画を描いて、「持って行け」と言うわけです――樋口

やっぱり吉阪先生の大島計画はいまだに早稲田では語り草ですよね――古谷

[4]　水取り山の建設を呼びかけた名文
「村ごとに競ってデッカイ奴をつくるがよい。その村がまず栄えるだろう。これは聖なる仕事だ。全員でかかれ。難しい仕事じゃない。何千年前の人達の知恵なのだ」。これは単に建設行為に住民が参加してゆくことだけをさすのではなく、自らの地域を自らの手でつくりあげてゆくというまちづくりの理念なのである。さらに単なる水確保の大施設なのではなく、共同体のシンボルなのである。『大気の中の水をつかまえる三葉虫、生物が生きはじめた初源をつくろう』[文:吉阪隆正]



上――水取り山計画:平面図/下――水取り山の先端の岩山内部:大気中の湿気を、温度差を利用して補足し水を取る[出典:『吉阪隆正集12―地域のデザイン』]

名護市庁舎
所在地:沖縄県名護市港1-1-1
設計:Team Zoo 象設計集団+アトリエ・モビル
敷地面積:12,201.1m²
建築面積:4,774.1m²
延床面積:6,149.1m²
規模:地上3階
構造:SRC造
工期:1980.3–1981.6
–
西棟から東棟を見る。
アサギテラスをブーゲンビリヤが覆っている

樋口｜延長とは違うんだな。やっぱり、ここでは自分の仕事はできないと思うから辞めるわけでね。

古谷｜やっぱりある種の決別はあった。

樋口｜そうそう。だから、3人とか5人でやることは考えもしないで、それぞれが「そろそろ1人になってやるか!」と思っていた。

富田｜最初は場所もそれぞれが持つようなイメージでしたけど、お金もないし、一緒の場所を借りて電話も1本でやろう…というぐらいの感じでした。

古谷｜それで最初の仕事は、「沖縄こどもの国マスタープラン」[1971]ですか?

樋口｜あれはもう、象をつくる1年ぐらい前に、U研に入ってきていて、僕、ジュニア、丸山(欣也)さん、重村でやっていたんです。完全に仕事になったのは、象になってから。

古谷｜それが、その後の沖縄とのつながりになるわけですか?

樋口｜僕たちが沖縄をすごく好きになったところもあるけど、やっぱり偶然、仕事がつながっていくというか、自分の意志でどうこう動くものじゃないよね。それをやっている間に「恩納村の基本構想」[1972]を頼まれてね、これは重村がチーフ。まちと真っ向から反対する案を出して、クビになったんです。言いたいことを言っていたからね。そしたら名護市が拾ってくれた。だから偶然であり必然か…。

古谷｜その後は、「今帰仁(村中央公民館)」[1975]があって、「名護市庁舎」[1981]につながっていくわけですけど、僕たちはちょうど学生だったから最初、鮮烈だったのは、2つの住宅「ドーモ・アラベスカ」と「ドーモ・セラカント」[共に1974]です。一見すると全く対比的なデザインだけど、あれが生まれた背景は何かありますか?

富田｜1975年なのね、発表したのが。それで今帰仁も75年なのね。

古谷｜住宅は、ちょっと前でしょ?

富田｜そうです。だから今帰仁も含めると、その3つはもう全然違う。

古谷｜三者三様ですよね。それは中心になった人が違うとか、それともそれぞれ場所が違うからとか…。

富田｜やっぱり場所なんじゃないでしょうかね。

古谷｜でもそれらは、誰かが中心になるというよりは、割合、盛んに議論してつくっていかれた感じですか。

樋口｜誰かが中心にはなっているけど、そいつだけがやるというケースじゃないのがほとんど。例えばアラベスカなんかは、当然、富田さんが中心になって、僕もやったりしている。

富田｜みんな最初はいろんな案を出したしね。

樋口｜いろんな案を出すけど、現場を最後まで面倒を見る、そういう意味の担当みたいなのはあるよね。

古谷｜では、さっきのU研のテーブルじゃないけど、誰もが口を出したりアイデアを出したりできるわけですね。

富田｜できますね。

古谷｜当時そういう共同体のようなものが周りにあったんですか? 今でこそ、そういうことを標榜する人はいるけれども、当時はそんなに変幻自在な共同体はなかったような気がしますけどね。

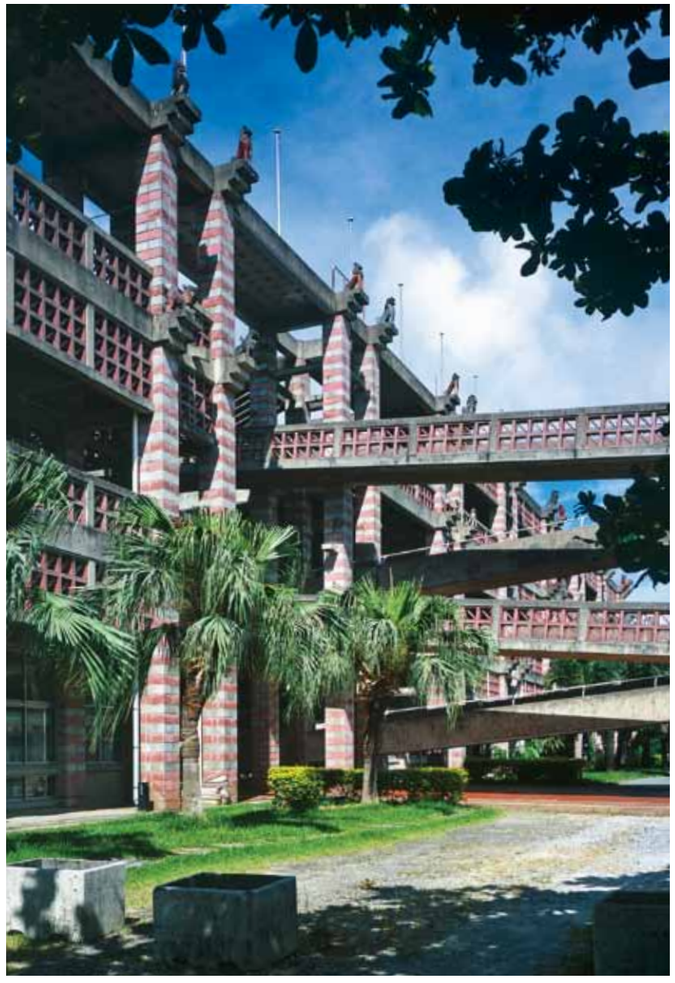
樋口｜だから、それがうまくいった例でしょうね、象は。本当はすぐケンカ別れするような話しかしていないんだから。

富田｜お役所に名刺を持って営業に行ったこともあるんですね。「象設計集団です…」なんて置いてくると「君、集団なんて幻想だよ」と言われちゃって、課長さんに…(笑)。

樋口｜沖縄では「"象グループ"の皆さん」って、グループになっていた。もっとも沖縄の仕事は僕らだけじゃなくて、ものすごい大勢の人とやっていたからね。それこそ農業の学者から、海に潜るダイバーとか、海の調査とか、いろんな連中とやっていたから、それでグループと呼んだのかもしらんけど(笑)。

名護市庁舎のコンペ

古谷｜何と言っても象設計集団の名前が一般に広く



南面外観。突き出たスロープと、海を望むシーサー

象設計集団の名前が一般に広く浸透したのは、やっぱり名護市庁舎だと思うんですよ——古谷

[5] …本競技を公開することの意義は、「沖縄における建築とは何か。」、「市庁舎はどうあるべきか。」という問いかけに対して、それを形姿として表現し、実体化しうる建築家とその案を広く求めることにある。(中略)主催者が市庁舎を建設するにあたってまず求めることは、沖縄の特異な自然条件とその風土を再考し、その上に立って沖縄を表現しうる建築家の構想力である。(中略)主催者の期待している新しい市庁舎は、地域の人々が自らを確認し、かつ自らを主張していくための活動の拠点となり、地域の自立と自治を支える拠点としての庁舎である。…
[名護市庁舎競技設計要綱から抜粋]
[6] 『建築文化』1982.1

今帰仁村中央公民館

浸透したのは、やっぱり名護市庁舎だと思うんですよ。そのコンペの時のお話を伺いたいんですけど。

樋口｜亡くなったジュニアが主力になって、「やろうぜ」ということでやり出したんだけど、ジュニアはちょうど産専の先生もやっていて、学生たちに、「俺は俺でやる。お前たちも応募しろ。だからお前たちは敵だ。終わるまで会わない」って宣言したんだ。

古谷｜あれは公開のコンペで、誰でも応募できたんでしたか?

樋口｜そう。コンペの要綱[5]としては非常に立派な文章だったと思う。

古谷｜あの当時は、俗に言うとオープンで公正なコンペが、あんまりなかったんですよね。

樋口｜そうそう。だから、あんなちっぽけな人口3、4万のまちがオープンコンペを打ったこと自体がすごかった。それと、やっぱり要綱が、実にしびれる内容でね。審査員の清家(清)さんと槇(文彦)さんが、それにきちっと応えようとしていた。僕らが取ったんだけど、実に立派なコンペだったと思うね。実は、僕らは入ると思ってなかった。名護市基本構想、基本計画などで名護市には、前からずっと入り込んでたから、みんな知っているし、役所に行ってはいつも意見が対立してワンワンにやっていたから、たぶん、「象はもういいや」ぐらいの感じがあったと思うね(笑)。

古谷｜もうちょっと、スッキリやれる人とやりたいと(笑)。

樋口｜そうね。市長なんかは、象だけは絶対にやめてくれ…という感じだったと思うな。その時、清家さんと槇さんは「案を取ったんじゃない、“象”を取ったんだ」と言われたんだよね。市長は反対だったと思うよ。

富田｜それで取ってから呼び出されてね、「あんな柱だらけは直せ、柱を取れ」と。

古谷｜柱はいっぱい建っていますね。4本セットで。

樋口｜4本を1本にしろとかね。でも2人の審査員は偉くてね、そのたびにちゃんと来てね、僕らも体育館の中に新聞紙で四本柱の現寸模型をつくって、「こういうわけで邪魔にならない」と言ったんだけど、最後に“大部屋”をつくることで手を打ったんです。僕らは「役所に大部屋はつくらない」と言ったけど、「柱を途中、跳ばして、大空間を1階につくることで手を打とう」と。役所も渋々手を打って、審査員も、「そういうことなら…」ということで出来上がったんだよ。やっぱり大変だったね。

古谷｜もうその頃は、沖縄のことをある意味ではだいぶ理解されていて、その土地にある何が建築の形を生み出すかを、すでに実感されていたわけですよね。

樋口｜今帰仁ぐらいから、その場所を中心において考え、領域を広げていくと、発見的方法、潜在資源の発掘など、コンセプトが明解になっていった。

古谷｜名護市庁舎の資料に「親泊元高先生とガジュマル建築論」[6]が書いてあって、地域にあるものをもう一度見直すという中に“斉場御嶽(セーファーウタキ)”のことが出ていたんです。それで、はたと思ったことは、僕は最初に斉場御嶽に行った時、沖縄にはウタキがあることは知っていたけど、詳しくは知らないまま行ったんです。で、ふと通りかかったら、導かれるようにどんどん奥に入って行きたくなるような感じがありました。森の中へ道がずっと続いていて、どんどん自分で迷い込んで入っていくような感じがあったんです。

樋口｜それはコンペの説明書にがっつり書いた。名護市は市の中心が山なんだ。里山に近いのは“クサテの森”って呼ぶんだけど、まず海から川をさかのぼって行くと集落があって、背後にクサテの森、その中の奥深いところにウタキがある。だから、それは意識しているわけ。要するに名護市庁舎は集落の構造をそのまま持っている。斉場御嶽よりは、名護市にいっぱいある普通のウタキの方がこれにはふさわしいと思うけどね。簡単に言うと、ウタキっていうのはね、クサテの森にあってね、イビ(霊石)と香炉以外には何もない、ガジュマルの樹木に囲まれたからっぽの空間。光のかけらがキラキラ降り注いで、神が降臨、鎮座する。そういうのは集落ごとにいっぱいあるんだよ。

古谷｜なるほど。名護市庁舎を初めて見た時も、何の道しるべがあるわけじゃないけど、本当に中にどんどん入って行きたくなるような感じがありました。

樋口｜だから木を植えたのは、他のプロジェクトと違って、僕らにとっては絶対必要だった。周りを樹木で埋め尽くしちゃう必要があったわけね。だから普通に木を植えるのとはちょっと意味が違ったんだ。

古谷｜先ほど、立派なコンペだったというお話でしたけど、完成してからの大竹さんの文章を読みますと、せっかくの公開コンペを経て出来たものだから、見事につくって完成させよう…という意気込みみたいなものが、その文章から感じられました。

樋口｜ひとつはね、四面楚歌だった、正直に言うと。象にやらせたくなかったわけね、市は。象のセンス、あるいは象の空間を変えさせたかったから、僕らもすごく力を入れてやらないと崩されちゃう…みたいな状況ではあった。それをジュニアは文章にしたんじゃないかな。それと、やっぱり審査員の清家さんと槇さんが、自分の考えを断固主張して、最後の最後まで責任を取ってくれたし、僕らの相談にも応じてくれた。立派だったと思う。今の審査員とレベルが違う。

古谷｜柱だけじゃなくてアサギテラスも減らせとか、いろんなことも言われたんですよね。

コンペは亡くなったジュニアが主力になって、「やろうぜ」ということでやり出したんだけど…——樋口

樋口｜そうそう、要するに骨を全部抜かれそうになった。その辺は審査員が「それはないだろう」と、かなり応援してくれたと思う。それから役所の中に、僕らに味方してくれる人もかなりいた。だから建物というのはデザイナーが決めるんじゃないんだよね。僕らはもともとそう思っているけど、結局、役所の人、そこに住んでいる人、施工者とか、その時の状況によってものが生まれてくる。そういう意味では、象は非常にラッキーだったから、ああいう名護市庁舎が完成できたわけね。普通だったら建たないでしょ。やっぱりすごく恵まれていたと思う。

古谷｜『建築文化』の写真でしたかね。ワーッと竣工式のお祝いをしている写真がありましたね。

樋口｜ああ脩ちゃん(山田脩二)の写真ね。

古谷｜みんながアサギテラスのところに座って。みんなでつくったという感じがみなぎっている写真で、すごく印象的でした。

樋口｜そう見えるけど、実はあの時、大変だったんだ。建築関係の人、2、3人に囲まれて「お前らちょっと、屋上に上がれ」と言われてさ、ぶん殴られそうになっていたんだ。市長と肩が触れた瞬間に「もう少し大人になれよな、樋口君」、「どっちがだよ」とか、そういう熱気、良い熱気だよね。だからみんなで思い思いに祝っているんだけどね。エキサイティングだね。

古谷｜火花が散っていたんですね。そんなに火花が散っていたとは…(笑)。

樋口｜だから多くの人は喜んでいるけど、担当者同士は複雑な喜びを共有している。とにかく無事出来上がったことが、とてもうれしかったね。

富田｜樋口さんたちが殴られそうになっている時に、私ね「ちょっと来てくれ」と岸本(建男)さん[7]からテラスの上の方だったかに呼ばれて、「この人たちに謝ってくれ」という感じだった。

古谷｜謝ってくれ?

富田｜そう、そういう感じだった。

樋口｜岸本さんは役所をクビになりそうになったり、もう大事件が起きていてね、ただ非常にドラマチックで、そういう時代だった。それから名護市庁舎をつくる時の心意気みたいなのは僕らだけじゃなくて、役所の人も持っていたということでしょ。「建築家にやられてたまるか」という。特に最後の色なんか、事件だったよね。富田さんと僕は、主に富田さんだけど、1週間以上かけて沖縄の色を拾って分析して、華麗な色彩計画を立てたのね。そうしたら市長が怒ってね。

古谷｜華麗とは、どんな色ですか。

富田｜赤と緑みたいな、いろんな色です。

樋口｜「役所にはふさわしくない。これじゃあキャバレーみたいだ。全部真っ白にしてくれ」って言われて、それで夜中にペンキ屋を集めて一部屋だけ予定どおりに塗っちゃった。

富田｜1ランク彩度を下げましたけどね(笑)。

樋口｜そしたら次の日にもう大騒ぎになって、僕も市長にわびを入れに行った。

古谷｜それは結局、塗り直されたんですか。

富田｜ううん。彩度を下げたら、少しぼけたので…。

樋口｜ただ、こっちはすごく時間を使って力を入れた色彩計画だった。世の中ではみんな色のことを言ってくれないけど、すごく力を入れたんだ。幻の色彩計画。

古谷｜シーサーの話はたくさん聞いた気がします。

樋口｜シーサーは良い話が多かったね。上げる時はクレーンで上げるでしょ。つくった職人が母ちゃんと子どもを連れて見に来てさ、「やっぱり俺のがいいだろ」って言うのさ。そういう風景は感動的だったね。56体全部、違う人につくってもらったからね。シーサーは世の中に分かりやすい話だった。

古谷｜一つひとつ違って、見ていても飽きないですね。

樋口｜観光バスも止まるからね、今は。

古谷｜それはいいですね。最後に、林昌二さんが面白い批評[8]を書かれたのを覚えてらっしゃいますか、何かの雑誌に。

樋口｜僕は現場で林昌二さんを案内したから、よく覚えている。

古谷｜その中に、「ファサードがあるのが良い」と書いてありました。

富田｜それは読みました。「大きすぎず小さすぎず、ちょうどいいスケールだ」とかって。

古谷｜「それがよろしいんであります」みたいな言い方でね。「成功したファサード主義」、「獅子たちは屈託もなく」、「3階建てというのがまことによろしい」 …と。屹立した感じじゃなくて、ファサードがゆったりとした感じがありますから、それはすごく良かったと。

樋口｜あと、斜路があるでしょう。あれがとても気に入っていたね。「実に素晴らしい」って。

古谷｜「設計に密度がなければ建築が人を引きつけることはありません」と書いてあったのも、非常に分かる感じでした。

進修館と笠原小学校

古谷｜「(宮代町コミュニティセンター)進修館」[1980]は名護市庁舎が終わってすぐというよりも、名護市庁舎をやっている頃からの仕事ですか?

富田｜やっている頃に、進修館は始まっています。

古谷｜やっぱり埼玉と沖縄では、いろいろ違うと思いま

[7] 岸本建男[1943-2006]
沖縄生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。名護市総合計画・基本構想に携わる。1998-2006年、名護市長。その間、普天間飛行場返還に伴う代替施設の条件付き受け入れ容認、九州・沖縄サミット開催など
[8] 林昌二「成功したファサード主義」『新建築』1982.1

宮代町コミュニティセンター進修館

すけど、埼玉の中にも沖縄のアサギテラスのようなものを発見することはできたんですか?

富田｜うーん、何か似ていますね、出来たものは。

樋口｜高さの話は富田さんが散々していたんです。

富田｜水のこと?

樋口｜そうそう、水のこと。進修館にしても、ちょっとした高さがあるでしょ。

富田｜あそこは関東平野の真っただ中で、本当に真っ平らなまちでね、そこにちょっとした丘をつくるだけでもドラマチックなんです。「(宮代町)笠原小学校」[1982]も進修館も両方、そういうふうに考えていたんです。進修館があったところは、沼地を埋めたようなところで、もしそこが洪水になったら、水が上がってくるだろうという高さがあるわけね。そこが大体2階で、すり鉢状の庭をかけ上がって、進修館の回廊まで逃げると助かるんです。

樋口｜フィールドワークはすごくやっているんだ。屋敷林の状態とか、水の状態とかね。

富田｜あそこからちょっと離れたところに、昔、原道村、今は大利根町(現・加須市)があって、私はそこに疎開していたんです。祖母の田舎がありまして、そこで水害にあったんです。1947年のキャサリン台風の時に。母屋は天井まで水が来ちゃって、そこから逃げて行ったところが、敷地の中にある水塚(みつか)っていう、もともと蔵が建っていた山なんです。そこから土手に逃げた人たちに大声で叫んで、船で迎えに来てもらって助かったんです。その時、船から見た景色がきれいでね、広~い水面の中に各家の高い木と屋根だけが見えているんです。進修館をやっていた時はそんな意識は全くなかったんだけど、今思うに…。

樋口｜いや、結構あったよ。笠原小学校をやる時は完全に意識していたもん。

富田｜高床でね、2階に行けば助かると思った。

樋口｜1階が埋まっても2階に行けば助かる。だからみんなああいう透け透けでね、かなり意識していたよ。

古谷｜普通は水害のようなものに遭われると、それがむしろトラウマになりますけど、富田さんは逆にいろんなものが水に埋まった風景を美しいと思われた。

富田｜実に美しかったんですけど、でもトラウマはあるんです。2、3年に1回は夢を見るんです。

古谷｜それは恐怖の夢?

富田｜恐怖の夢だけど、一方ではきれいだ…と(笑)。

古谷｜笠原小学校も進修館も含めて、そこが水没する時の風景と、その時に実際に避難できる高台の場所をつくるというレベルの差の話は、関東平野の利根川河川敷の土地に潜在したものから導かれたものだということはよく分かりました。それから笠原小学校の時に、教育の場所と生活の場所と、そして地域施設としての学校ということが書かれている。今ではみんながそれを考えるようになりましたから、これも先見性があったと思うんだけど、もう一つここで驚くのは、いまだに予想できない新たな活動のための、開放された空間が必要である、ということを学校の中で言われている。特に子どもが生活する場としては、これはすごい重要なことだと思うんです。これはもう、ずっと前から考えられていたんですね。小学校はこれが初めてでしたか?

富田｜初めてですね。あの後、だいぶたってから広島(「矢野南小学校」[1998])と、台湾で3つ(「中科小学校」、「土牛小学校」、「水尾小学校」[いずれも2001])やりましたけど。

古谷｜初めてやる種類の仕事の時は、議論が最も面白くなると思うんですけど、この時は地形の話以外に、学校として何か考えていたことはあるんですか?

富田｜この頃、オープンスクールがちょうど流行り出した頃でね、幾つか見に行きました。でも、これじゃないな、という感じがしましたね。

古谷｜いわゆる初期のオープンスクールですね。

富田｜それも先生とか議員さんたちとみんなで見に行ったんですね。そうしたら、これは自分たちのまちに合わないな…という感じでね、それで"宮代型オープンスクール"の形があるのではないかと考え始めたんです。それまでは兵舎型の学校が普通だったでしょ。私たちは一見、兵舎型なんだけど、違うオープンスクールがあるような気がしたんです。やっぱり各学級がきちんとした単位になっていた方がいいなと。

樋口｜僕らの原則にしている、「学校とは何か。教育の場だけじゃないだろう」という話は、真っ先にあったよね。

富田｜1日中暮らしている場所だから、家みたいなもの

宮代町笠原小学校
所在地:埼玉県南埼玉郡宮代町百間1105
設計:象設計集団
敷地面積:29,562m²
建築面積:4,644m²
延床面積:7,129m²
規模:地上2階
構造:RC造
工期:1980.12–1982.3
–
低学年棟から芝生の庭を見る

上左――低学年棟2階廊下/
上右――普通教室棟1階廊下/
下――中庭にも裸足で出る生徒たち

「学校は街」「教室はすまい」「学校は思い出」というキーワードを、みんなで共有するようになりました——富田

学校は生活のための場としてある、「学校はまちだ」というコンセプト…ですね——古谷

だと…。

樋口｜宮代町では、まちの人たちもそう思っていたんだよ。だから、その辺の合意形成は早かった。とっても意識の高い人たちが大勢いた。

古谷｜学校は生活のための場としてある、「学校はまちだ」というコンセプトだと思うんですね。そういうことが、あの当時でスッと伝わったんですか?

富田｜そうなの、スッと伝わりましたね。「学校は街」、「教室はすまい」、「学校は思い出」というキーワードを、みんなで共有するようになりました。

樋口｜みんな「そうだ、そうだ」って言うんだ。

古谷｜行政もですか?

富田｜そう。最初に頼まれた時に、教育長と町長と助役だったかしら。年配の方が3人向こうに並んでいて、こちらも3人いたんですが、いきなり「2ヵ月で図面を描いてくれ」って言われたのね。「子どもが増えちゃって、今、3つある小学校がもう満員であふれているから、すぐにつくりたい。だから2ヵ月で…」と言われて、もうびっくりしちゃってね。「描くだけなら描けるかもしれないけど、考えるとなるともう1年欲しいです」と言ったわけ。「私たちは今までの自分の歴史を考えてみると、小学校時代の思い出が一番鮮やかに出てくる。いろんなシーンをとてもよく覚えていて、楽しい時期だった。ああいう鮮烈な思い出ができるような時期に暮らす場所を、2ヵ月で考えるのは無理です」という話をしたら、だんだん、特に最年長だった教育長さんは涙を浮かべてね、「確かにそうだ」っておっしゃるの。3人共、そう思っちゃったのね。

樋口｜富田さんが田んぼのあぜ道を、学校へとぼとぼと歩く話をしたんだよ。そしたら教育長が思い出してワッと泣き出すような感じだったね。それでプレハブで開校して、設計期間を1年くれた。感動的だよね(笑)。

古谷｜それは素晴らしいですね。実感が込もっていたから…。

樋口｜というか、ピシッと周波が合ったんだろうね。僕らもびっくりしたもん。

富田｜ちょうど疎開していた小学校のことを、私は思い出したのね。みんな裸足で、朝礼の後なんか足洗い場に殺到してドロドロになったところなんて、私はすごく好きだったわけ。そういういろんな思い出が出てきてね。でも、笠原小の子どもたちが裸足で暮らすっていうのは、後に保健体育の先生から出た提案だったんですけどね。

古谷｜ここで裸足になるのは、富田さんだけの提案じゃなくて、先生からの発想にもあったんですか?

富田｜私が言ったのじゃなくて「裸足は頭脳を刺激する」という考えをお持ちの先生からの提案でした。

樋口｜こういうのは、さっきも言ったように建築家が言ったって実現しないでしょ。やっぱり使い手側が思わなきゃダメなんだ。

富田｜「裸足は良いな」と言って下さったので、配置計画が決まったようなところがありますね。裸足だとどこからでも庭に飛び出していってもいい。戻る時は足を洗えばいい。足洗い場はたくさんつくろうというわけで、ああいうプランが生まれました。庭から半屋外へ、室内へと空間が連続して、子どもたちが外も内も元気に動き回るだろうと考えたんです。

樋口｜裸足というのはものすごく大きくて、出入りが自由になるでしょ。校庭をきれいにしなきゃならないでしょ。だから最初の頃は先生方もまちも、新しい教育に向かったんだよね。教科書をつくってみたり、保育の先生はサツマイモを育てたり、いろいろ自分で考えて教育をやり出した。だからブツ以外に場所を良くするファクターは、むしろ“どう使われていくか”ですよね。

古谷｜そうですよね。

樋口｜この小学校も、やっぱり今でも結構、当時のまんまだよ。人数が減ってきたけどね。

富田｜だいぶ減っちゃって寂しいけれども…。

古谷｜そうですか。ところで、大竹さんのお話を少しお伺いします。宮代町の時はご一緒でしたね。亡くなられたのはいつでしたか。

富田｜45歳で亡くなって、今、生きてれば72歳のはずなんです。

古谷｜そうすると27年前。1983年ですから、笠原小学校のちょっと後ぐらいですね。

富田｜そうね、進修館でお葬式をしたんですよ。

古谷｜そうでしたね。おふたりにとって…、というのも聞き方は変なんだけど、象設計集団にとって、大竹さんはどういう存在だったんでしょうか。あの時は突然の話で、全く予期せぬことだったと思うんですが。

樋口｜まあ、いるといないじゃまるで違う。人一人死んで同じということはあり得ないからね。

富田｜そうね。特にジュニアの場合はね、全然違う。

樋口｜三人三様だったのが、欠けるとね、やっぱりいろんなことを変えなきゃいけなくなるよね。それぞれの個性を活かしてやっていたから、ひとつ欠けちゃったって感じだよね。

富田｜とにかくどのプロジェクトの時も、ジュニアが、まず最初に突っ込むという感じだったでしょう。

樋口｜そう、最初に走り込む係というか。

富田｜フォワード?

樋口｜いやいや、フォワードは違うよな。フォワードは点を取るからね。攻撃型ミッドフィルダーかな。

古谷｜走っていくだけですか(笑)。

樋口｜みんなを引き連れてね。例えば若い連中は、ジュニアファンが多いんだけど、ワアッと走っていく。走ることが目的だから、有無を言わせず、みんな走っていく。だから、若い連中はよく言うんだけど、「象はいつも何かと言っちゃ、夜から朝まで動いているみたいだ」って。それはジュニアがやっていたんだよ。僕らは一緒に走ると疲れるから、あんまり…(笑)。

古谷｜突っ走ってもらって、少し、疲れた頃に後ろから出てきて(笑)。

樋口｜嫌になると玉を渡すとかね、こっちに。そういう意味では、最も貴重な存在だったよね。象の外に見えるシンボルみたいなことをやっていた。やっぱり人気があったのが大きいよね、面白くて…。人間が面白いっていうのは、重要なことだよ。

古谷｜それこそサッカーがお好きだったわけだけど、僕はその中にいなかったから分かりませんが、お亡くなりになった時、みんながショックを受けている様子とかは、よく覚えているんです。その頃、僕は早稲田に残っていた頃だったから。

樋口｜それはもう、ショックを受けましたよね。

富田｜進修館でお葬式をして、お通夜はジュニアの自宅でしたでしょ。自宅は坂道なんですけど、その坂道が若者でいっぱいになってね。

用賀から台湾へ

古谷｜その後、僕の記憶に残っているのは、世田谷区の「用賀プロムナード」[1986]なんです。これも建築家の仕事なのか…と思った。その後、象の中では公園というか、内部とも外部ともつかないような大きなランドスケープのデザインが、すごく大きな柱になっていると思うんですよ、今に至るまで。

富田｜確かに用賀プロムナードが重要なポイントになりましたね。

古谷｜次の段階に入られて、台湾で新境地が開かれていくわけですね。台湾に行くきっかけは、どういう経緯ですか。

樋口｜吉阪研の後輩で郭中端(かくちゅうたん)という台湾人が象の東中野の事務所に来てね、「台湾に来ないか」って言うんです。その時は、「ボート小屋を1軒、設計すれば、台湾にタダで行けるよ」という話だったから、行こう行こうということだったんです。行ってみたら、12kmの川の計画全部だった。でさ、「今日が会議だ」って言うのよ。ボート小屋ひとつで何で会議をやるのかなと思っていたら、県とか国の役人がずらっと30人ぐらいいるところに放り込まれてさ、何だこれは…という感じだった。僕はプロジェクトの名前すら分からない。それが始まりです(笑)。

古谷｜アドリブで何かお話されたんですか?

樋口｜うん。アドリブというか、途中から分かってきて「僕らはこういうふうに考えるけど、この仕事はやらないよ」って言った。そしたら三日三晩くらい口説かれた。県知事も気に入ってくれたし、課長も「お前らはこんなに面白い仕事をなぜやらないんだ」と言ってね。とうとう僕らが折れたっていう話だよね。

古谷｜何でやりたくないと思ったんですか。

樋口｜話を聞いていたら、この仕事はたぶん10年間ぐらい続く仕事だろうと、その時にもう読んだのさ。もう一つは外国の仕事って普通はお金になるんだよ。だけど、ここでやっても金にならんな、この仕事は赤字だぜ…という思いがあったんだよ。赤字は外国だと、さすがにやばいからね。結局は向こうの情熱に負けたのさ。それこそ台湾で民進党の県知事が初めて生まれようとしている時だった。その知事が郭中端を通じて僕らにやらないかというわけだからね。

古谷｜生まれたて?

樋口｜そう、生まれようとしている時で、その知事が民進党で、しかも切れ者だったわけ。この人も亡くなっちゃったけど、断固として粘りに粘って、部下も粘りに粘って、僕らが口説き落とされて、まずは冬山河の計画(「宜蘭県冬山河修景計画」[1988])をやった。これがずっと続くわけだけど、ワンステップは2年ぐらいで終わって、その後、「宜蘭県庁舎」[1997]をやってね。あれも断ったのよ、とてもじゃないけどできないって。だけどこの時は、ほとんど台湾スタッフで、象も台湾に事務所を構えたし、象のスタッフも「やろうよ」と言うしね、僕は断ったけど、まあ、やって良かったよね。

古谷｜今でこそ台湾や中国で仕事をする例はたくさんありますが、当時はほとんどなかったでしょうね。

樋口｜そうだね。日本では、設計会社もほとんど入ってなくて、工事会社としては鹿島とどこだったかもう一社。国交がないわけでしょ。日本政府が何かちょっと刺激すると、ビザが下りなくなっちゃうとか、簡単に言うと、非常に政治的なことに、あっという間に巻き込まれるわけ。その頃の台湾の新聞を見ると、第一面に“日本象設計集団、新植民地主義”とかデカデカと書かれてさ、いろいろ攻撃する。民進党が初めて政権を取ろうとした直前で、攻めていた時代だから、要するに僕らを叩くというよりも民進党を叩くわけね。

古谷｜その格好の標的になった。

樋口｜やっぱり民進党の県知事が理想に燃えていたし、役人たちもね、気分としては明治維新の連中に会うみたいな感じなのよ。日本の役人とはわけが違って、「私の郷土、国をこうしたいんだ」という、強烈な意見

用賀プロムナード[撮影:1996年]

を言ってくる。そのために国の役人を辞めて、地方の役人になって頑張るとか、そういう人間が出始めた時代なんだよ。結構しびれるでしょ。

富田｜打ち合わせでも、偉い人も下の方の人も、もう同じように発言してね。一晩中やっているの。

古谷｜都市をつくるとか、国をつくるという野望や希望があるんですね。

樋口｜そう。ちょうど僕らが行っている時期に、例えば新聞発刊の自由や、政党をつくる自由が生まれるわけ。僕らは、そんなものはずっと前に自由だと思っていたら全然…。いわゆる発言の自由とかが、ちょうど法制化されてきた。僕らが行った頃は、映画館に行くとみんな起立して台湾の国歌をまず歌って、それから映画を見るような世の中だった。そういう中で、いろんな自由を得ていくわけよ。

古谷｜その時期にちょうど冬山河の仕事をされた。

樋口｜県庁舎の時も、要するに“建築の自由”みたいな、すごいことを彼らが言う。そうすると、「やるか!」という気になるでしょ。

古谷｜なってきちゃいますよね。

樋口｜内心さ、少し困りながらもね…。

古谷｜県庁舎はコンペだったんですか?

樋口｜コンペだったけど、もう特命に近いね。県知事に「何が何でもやってくれ」ってゴリ押しされて、基本設計だけと言いながら、例によって実施設計もやろうとか、僕らの悪い癖だよね。ズルズルやることになって…、出来上がるまで10年以上かかっているんじゃないかな。ただ、それが面白くてね。

古谷｜この仕事は地元と共同してやられたんですか。

樋口｜象と高野ランドスケープが中心ではあるけど、多くの台湾人とやった。日台合作だね。

古谷｜なるほど。建設となると、たぶん勝手が違ったと思いますが…。

樋口｜そりゃ、違うんだよね。まず施工のレベルが違う。例えば、コンクリートの仮枠がない。それから職人がみんな農民だから、農繁期には誰もいなくなる。それに、素人だから絶対できない。それを僕らは県知事から「品質の向上が第一だ。それをこの県に定着させてくれ」って言われていた。監督していても、いくらたってもできないんだよ。仮枠がないから余っているいろんな板で勝手にやっちゃうのね。スペーサーもない。だから、壊れちゃう。日本では考えられない。日本はゼネコンを始めとして、施工者はすごく優秀だけど、台湾では、僕ら自身が施工上のことをものすごく勉強してやらないとダメなんだ。施工者が知らないから、図面を描いて終わりじゃないんだよ。完成するまで責任を持たなきゃいけない。今はだいぶ違って、少しは楽になったけどさ。例えば、床に平らにタイルを張るなんてできない。何度張り直しても、できないものはできない(笑)。

古谷｜階段が一段一段、同じ高さにならないとか…。

樋口｜そうそう、県知事が平らにしたくてさ、僕たちは「もう、このぐらいでいいんじゃない?」って言っても、知事が「ダメ」って言うのね。県知事は偉いんだよ、朝5時に起きて現場を見回るの。

古谷｜行くわけですか、現場に…(笑)。

樋口｜でね、「樋口さんどう思う?」って聞く。「どう思う?」ということはやり直せと言っていることなんだよ。でも助かったのは、「お金は出すよ」と言ってくれてね。リーズナブルにいけたところは良かったね。

古谷｜デザインのフィーの方はどうだったんですか。

樋口｜彼らは精一杯、頑張ってくれた。だけど、やっぱり外国でやる場合は、最低、日本の3倍くらいはもらわないと、とてもペイしないのね。それと為替が絡むでしょ。これもびっくりした。自分が為替に絡むとは思わなかったからね。為替相場が、あっという間に動くんだよ。

古谷｜ひっくり返っちゃう。

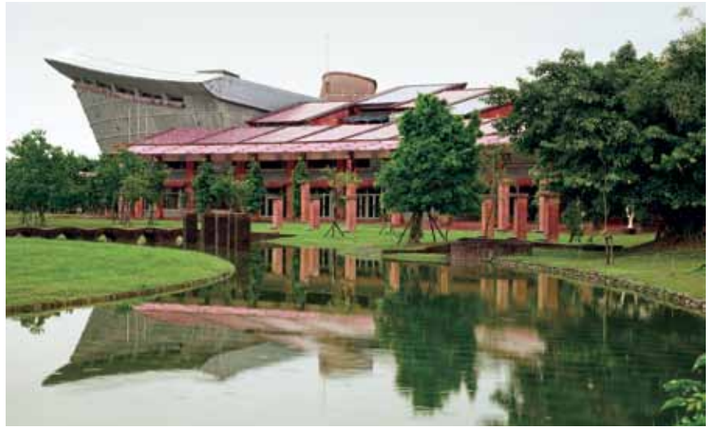
樋口｜最初の頃は5円でさ、今は3円切ってるでしょ。僕らは台湾円でもらうからね。

古谷｜円高がこたえるわけですよね(笑)。

樋口｜そう(笑)。外注するものもいろいろあるしね…。外国で仕事をするのは、かなり大変だよね。やっぱり大先生で行ってすごいお金をもらわないとさ。僕らみ

宜蘭県庁舎/宜蘭県議場
所在地:中華民国台湾省宜蘭県
設計:象設計集団
–
宜蘭県冬山河修景計画
所在地:中華民国台湾省宜蘭県
設計:象設計集団、環境造形研究所、龍環境計畫
–
宜蘭県庁舎

上――宜蘭県議場/
下――宜蘭県冬山河修景計画



高橋建設[写真:北田英治]

たいに地元に入り込んでやると、大変なんだよね。

古谷｜県知事がいらしたから、ある意味では…。

樋口｜だって、亡くなったでしょう。でも台湾に事務所があってスタッフがいるでしょう。大変だけど日本では味わえない面白さがあるね。やっぱり仕事は面白いのよ。

古谷｜勢いがあるというか。つくろうという感じがある…。

樋口｜勢いは、まだあるよね。日本より全然いいよ。

十勝へ

古谷｜最後に「高橋建設」[1998]のお話を伺います。ここへくると、ランドスケープだか建築だか本当に区別がつかなくなってきますね。一種、集大成的になっていると思うんですけど。台湾から十勝に行かれたのは何年ですか?

富田｜1990年、20年前です。

古谷｜台湾の仕事を始めて、しばらくたった頃に十勝に移住されましたよね。十勝に行かれるきっかけは何でしたか。

樋口｜偶然なんだよ。

古谷｜これも偶然ですか(笑)。

富田｜前にいたところを追い出されることになって、どっかに行かなくちゃいけなくてね。いつも象の事務所が移るのは、追い出されるからなの。マンションを建てるから出てくださいとか、大体、貸主の都合なの。

樋口｜そういう移動を楽しんでいたんだけど、ある日、突然、「十勝に廃校がいっぱいある、選べるぞ」っていう話が舞い込んだんだよね。要するに木造の校舎って、僕ら好きなんだよね。十勝が好き嫌いというよりも、校舎を全部タダでくれるというわけでしょ。これはやっぱりひかれちゃったよね(笑)。

古谷｜もらえるのかと思ったら…、その気持はよく分かります(笑)。

樋口｜もう一つは高野ランドスケープと一緒に動こうねって決めていたから、広くなきゃダメなわけ。移るなら東京みたいに狭々しない方がいいと思っていたところだったから、夢みたいな話だった。飲み屋が遠いとか、やっぱりいろいろとあるんだけどね(笑)。

古谷｜だけど、僕たちからすると、「沖縄で名前を成した象設計集団、遂に北海道に到達!」みたいな、制覇した感じがあって面白かったです(笑)。

樋口｜最初「何で十勝に来たのか」って、地元の新聞に散々、聞かれたのよ。そのたびに「偶然」とか「別に北海道が好きなわけじゃない」って答えているんだ。北海道に行く人はみんな北海道が好きで移るわけだけど、僕はそうじゃなかった。学校は好きだったけど。

古谷｜でも偶然にせよ北海道まで行かれたから、本当に対極的ないろんな環境を体験することになっちゃったわけだけど、それはどうでしたか、行ってみて。

富田｜「寒いというのはこういうことか」って、よく分かりましたね。歩いていて胃が痛くなってくる。いっぱい着込んで、でも西から吹いてくる風に向かって歩いていかないと事務所に着かない。胃がキリキリしてね(笑)。

古谷｜十勝で目指されたことはどういうことですか。まだ、やり足りないこと。

樋口｜まず十勝でも20年になるんだけど、地方に住んで日本が東京を中心とする大中央集権国家だと実感してきた。こりゃ、やばいぞ。だからね、やり足りないというより、何度も言うようにその場所、そこに、あるいはその時によって建築は変わるべきだと思うのね。その場所に建って生き生きとしていること。例えば高橋建設は周りを見なきゃ理解できないんだけど、大工業団地の中にある。通りには草木が生えているけど、ものすごく荒廃した環境なの。その中で、これこそ高野ランドスケープとばっちりジョイントしてつくり上げた。建主の高橋さんが、やっぱり緑にしたいというわけ。これは100m角あるんだけど。やっぱりそういう場所と大きく絡んでいて、建築そのものが目立ってはダメ。敷地全部を緑化しよう、建物は地面の下、つまり埋めてしまえというわけ。昔から埋めるのは好きだったけどね。

古谷｜まぁそうでしょう。地面と連続している、というか格闘している。

樋口｜ただ面白かったけどね。

富田｜そう。その環境がとってもうまく育っている感じがしますね。行くたびに育っているなと思う。

樋口｜こんなものをよくやらせてくれたよね。北海道の仕事はほとんど高野さんと一緒にやっているんだけど、非常にうまくいくんだ。木が育って、建物が消えていく。すごいよ。

古谷｜では最後に、これが一番聞きたいけど、うまく聞けそうもない質問ですが、吉阪先生がきっかけで建築をされたというふうに樋口さんはおっしゃいましたし、富田さんも渡り歩いた末に、最終的に吉阪先生のところから巣立たれたと思うんですけど、吉阪先生から学ばれた、あるいは影響を受けた最も大きなものはなんでしょうか。

富田｜それは難しいな…。「コップに水が半分入ってる時に、もう半分なくなっちゃったって言う人と、まだ半分あるって言う人がいる」っていう話を先生から聞いたのは、とても影響力があった。

樋口｜「まだ半分あるぞと思って生きなさい」ということ。それは僕も本当に、「おおっ」と思った。

富田｜もうちょっと具体的な建築の話では、先生がボストンにいらっしゃった時に、ジョン・ハンコック・タワーという45階建てか50階のタワーに、上りはエレベータで、下りは歩いて下りてみた。先生は、その頃まだバリバリの登山家だったわけだけど、途中で膝が笑っちゃって、下りるのが大変だったって。「君たち高い建物をつくってはいけない」と言われました(笑)。

古谷｜でも、本当は1回はやってみてもいいかなと思ったりもする(笑)?

樋口｜そう、富田さんが「1階建ての超高層」って言うのよ。なかなか皮肉っぽくて良いよね。

富田｜平屋なのね。高さは300m(笑)。窓がいっぱいあったり、光がこう入ってきたりしてね…。

樋口｜僕はやっぱり「何をやってもいいんだよ、自由なんだ。建築には自由があるんだ」と言われて、「そうか、建築をやってみよう」と思ったことだね。今でもそう思ってる。最近、建築家は腕をもがれ、足を切られ、ただのもぬけの殻の形だけの世界に置かれている。いつでも、どこでも、“建築は自由だ”と、羽を持っていたいよね。それが自分の活動のベースかな。

古谷｜僕はまだ先生の授業は受けられたから、授業で聞いた言葉が残っていますね。吉阪先生のお話って、10年たつとまたちょっと違った解釈ができて、先生が言ったことは、こういう意味ではなかったか…とか、20年たつと、また新たな解釈が生まれたりする。親の小言と冷酒は後から効くって言いますけど(笑)、それに近い感じで、ものすごく長持ちするんですよね。

樋口｜そうね、いっぱい書いているからね、本になっているし[9]。僕らにとってはとっても役に立っているよね、時々それこそ読み返して、「おおっ! やっぱりそうか」と思うことが多々あるよね。

古谷｜再発見があるんです。僕はとにかく吉阪先生は「大学は教師が学生を教えるところではなく、学生が勝手に学ぶところなんだ」ということをはっきりと分かっていたと思うんです。極端に言うと、教師はその場にいなくてもいい。だけど、「ここにこんなものがあるぞ」とは言わなくちゃならない。そんな感じなんです。今日のおふたりのお話も、それに通ずる気がします。どうもありがとうございました。

[2010年9月28日収録]

[9] 吉阪隆正集(全17巻)[勁草書房/1984–86]
- 生活論—人間と住居｜第1巻 住居の発見/第2巻 住生活の観察/第3巻 住居の意味/第4巻 住居の形態
- 造形論—環境と造形｜第5巻 環境と造形/第6巻 世界の建築/第7巻 建築の発想/第8巻 ル・コルビュジエと私/第9巻 建築家の人生と役割
- 集住論—集住とすがた｜第10巻 集まって住む/第11巻 不連続統一体を/第12巻 地域のデザイン/第13巻 有形学へ
- 游行論—行動と思索｜第14巻 山岳・雪氷・建築/第15巻 原始境から文明境へ/第16巻 あそびのすすめ/第17巻 大学・交流・平和

[取材協力]
- 象設計集団
- 名護市役所
- 宮代町立笠原小学校

–

[その他]
特記のない写真は撮り下ろしです

–

[次号予告]
「INAX REPORT No.186」の
「続々モダニズムの軌跡」は坂本一成氏です

談笑する富田氏(右)、樋口氏(中)と古谷氏

[対談後記]

心と体で取っ組み合う建築、建築家としての自分たちにできることは何か

古谷誠章

–

伊豆大島の大火の後、直ちに復興プランを携えて吉阪研究室が真っ先に現地に乗り込んだ話は、今でも伝説となっている。僕が早稲田に戻ったのが1994年で、その翌年1月に起きたのが阪神大震災だった。ちょうど昼から建築学科で会議のある日だったが、事態の重大さに驚くと共に、吉阪先生のその逸話を皆が思い出していた。関係者はその後、続々と現地に赴いたが、残念ながらさすがに吉阪先生ほどの号令をかけた強者はいなかった。

–

もう一つ僕が今でも毎年4月、新入生に最初に話しているのが、先生のこんな訓辞だ。「君たち新入生が卒業する頃には、世の中、ビルのひび割れ直しぐらいしか建築の仕事はないよ」。1974年のことである。前の年の暮れにオイルショックのトイレットペーパー騒動が起こり、好景気に冷や水がかけられていたとはいえ、70年万博以降の急成長の中にあって、そんな予想を立てた人は皆無だった。さらに、「卒業計画や学業でもし10番以内に入るようなら、その人はたぶん良い建築家にはなれない」とも言われた。その時代の価値観が永続するものではないという暗示だと今では理解している。そんな吉阪隆正のもとから生まれたのが象設計集団である。

–

富田さんには3年間ほど僕の設計演習をお手伝いいただいた。その時、教室で学生に言われた言葉、「みんなが今座っているちょうど腰の辺りまでお湯につかっていると想像してください。…何だか周りの人と親近感がわくでしょう?」これも鮮烈に覚えている。実は台風の大洪水の光景とつながっていたとはこの対談で初めて知ったが、建築と人間がつくり出す空間の考察として、これほど説得力を持つ比喩を聞いたことがない。

大火後の大島に飛ばされる樋口さんは、内心は“水とおにぎり”だけど…と思いながら、焼け跡に立って吉阪先生の「われわれ建築家にできることは何か」を理解する。描かれていたのは、水ではなく「水取り山」、おにぎりでなく「山型建築」、長期の復興計画に他ならない。

ふたりの会話には、随所に説得力のある言葉が出る。グループが議論を重ね、時に発注者や住民を巻き込んで引き起こす取っ組み合いのような建築づくりの真髄が、そこにあるように思えた。互いに真価が分かるまで心と体でぶつかり合う建築だ。

–

ふるや・のぶあき——
建築家・早稲田大学教授
1955年生まれ。1978年、早稲田大学卒業。
1980年、同大学院博士前期課程修了。
1986年から1年間、
文化庁芸術家在外研修員として
マリオ・ボッタ事務所(スイス)に在籍。
近畿大学助教授を経て、
1994年、早稲田大学助教授、NASCA設立。
1997年から現職。
主な作品:
アンパンマンミュージアム[1996]、
詩とメルヘン絵本館[1998]、
早稲田大学會津八一記念博物館[1998]、
ZIG HOUSE / ZAG HOUSE[2001]、
近藤内科病院[2002]、
神流町中里合同庁舎[2003]、
茅野市民館[2005]、
高崎市立桜山小学校[2009]、
小布施町立図書館「まちとしょテラソ」[2009]、
早稲田大学理工カフェ[2009]、
鶯庵[2009]、
T博士の家[2010]など。

特集2｜年譜

象設計集団作品年譜

主な仕事

［竣工・計画年／仕事名／所在地／掲載誌］
［*］はレポート提出｜［▫］は計画のみ｜［◇］は現存せず

1971 沖縄こどもの国マスタープラン［沖縄］
〈むむ／アームカバー〉・〈ぞぞ／マント〉製作［東京］
1972 波照間の碑［沖縄］
「文化」1977.11
沖縄こどもの国こども博物館［沖縄］
「文化」1977.11
ドーモ・バレーラ［東京］
＊恩納村基本構想［沖縄］
1973 沖縄子供の国じゃぶじゃぶ池［沖縄］
脳田邸［東京］
＊名護市総合計画・基本構想［沖縄］
1974 鈴鹿市勤労青少年ホーム［三重］
「文化」1976.12
ドーモ・アラベスカ［東京］
「ディテール」1975夏｜「都市住宅」1975秋（別冊，住宅第11集）｜「BRUTUS」1995.7.15｜「コンフォルト」1995.10｜「TOTO通信」2007春｜「芸術新潮」2008.2
ドーモ・セラカント［神奈川］
「都市住宅」1975秋（別冊，住宅第11集）｜『日本の住宅戦後50年』［彰国社／1995］
＊名護市土地利用基本計画・市街地基本計画［沖縄］
＊名護市工芸村基本計画［沖縄］
＊多野岳基地跡地土地利用計画［沖縄］
＊今帰仁村総合計画・基本構想［沖縄］
1975 今帰仁村中央公民館［沖縄］
「新建」1977.11／1979.12｜「住宅建築」1991.4（別冊）｜『Bauen mit Eigensinn』［Petruschat Verlag（ドイツ）／1996］｜「JA」1998.2｜「コンフォルト」1998.10
＊名護市総合公園／21世紀の森基本計画［沖縄］
＊今帰仁村第一次産業振興計画［沖縄］
ダガダカタン地区計画国際コンペ参加［フィリピン］
1976 富士ビル［静岡］
ドーモ・スクヴァーマ［東京］
埼玉県勤労青少年フレンドシップセンター［埼玉］
「文化」1976.12
＊今帰仁村第一次産業基本計画［沖縄］
＊石川市総合計画・基本構想および土地利用計画［沖縄］
＊那覇新天地市場計画［沖縄］
1977 船曳・岸田邸［東京］
＊今帰仁村暮らしの基本計画［沖縄］
名護市総合公園／21世紀の森実施設計［沖縄］
「文化」1977.11
◎伊豆高原ヴィレッジ計画［静岡］
石川白浜原公園［沖縄］
沖縄市民会館コンペ参加［沖縄］
1978 小牧図書館［愛知］
「文化」1978.5｜「新建」1978.5｜「ja」1978.8
風水の家［沖縄］
＊名護市買物公園計画［沖縄］
1979 時計ビル［東京］
ドーモ・バレーナ［神奈川］
＊沖縄市買物公園計画［沖縄］
1980 PL教団仙台中央教会［宮城］
「新建」1980.9
石川白浜原公園第2期［沖縄］
宮代町コミュニティセンター進修館［埼玉］
「文化」1981.10｜「新建」1981.10｜「ja」1982.7｜「Progressive Architecture（アメリカ）」1983.5｜『世界建築設計図集29―宮代町進修館』［同朋舎出版／1984］｜『POST MODERN AGE 1980−1990（新建築臨時増刊）』1990.8
労働省福祉事業団山口保養所錦グリーンパレス［山口］
「文化」1980.10｜「新建」1980.12｜「日経アーキ」1982.3.15
1981 杏の家［東京］
名護市庁舎［沖縄］
「建築知識」1981.12｜「近代建築」1982.1｜「文化」1982.1｜「新建」1982.1／1990.8｜「ja」1982.7｜「Office Age」No.28,1995.2｜「ディテール」1995春｜「建築計画・設計シリーズ7―庁舎施設」［市ケ谷出版社／1996］｜「コンフォルト」1998.10｜「日経アーキ」2009.3.9
＊バグダット美化計画［イラク］
子供空想美術館ワークショップ［東京］
＊宮代町基本構想［埼玉］
1982 宮代町笠原小学校［埼玉］
「文化」1983.9｜「新建」1983.9／1990.8｜「日経アーキ」1983.9.26｜「AJ」1987.11｜「教育と施設」No.21,1988｜「AXIS」No.53,1994｜「TOTO通信」1994.9−10｜「S. D. S. 2―学校」［新日本法規出版／1995］
ホテルとうがねや［東京］
ラ・ヴィレット公園国際コンペ参加［フランス］
沖縄青年会館コンペ参加［沖縄］
1983 成田邸［長野］
広瀬川河畔教会納骨記念堂［宮城］
セブン・キャリアーショップ［東京］
◇W.G.Bank室内設計［東京］
パリ・オペラ座国際コンペ参加［フランス］
奄美文化会館コンペ参加［鹿児島］
1984 ＊豊島区東池袋地区住環境整備計画［東京］
＊上尾地区駅前再開発計画［埼玉］
＊国営みちのく杜の湖畔公園・水とエネルギー調査［宮城］
1985 船橋市光風みどり園［千葉］
「文化」1985.8｜「新建」1985.8
◇安佐町農協町民センター［広島］
「文化」1985.8｜「新建」1985.8／1990.8
イーフ観光ホテル［沖縄］
＊江東区水上バス計画［東京］
ドーモ・チャンプルー［沖縄］
くすの木サロン［東京］
「文化」1986.9｜『建築設計資料17―歩行者空間』［建築資料研究社／1987］
世田谷サイン計画［東京］
1986 用賀プロムナード［東京］
「文化」1986.9｜『建築設計資料17―歩行者空間』1987｜「日経アーキ」1995.11.25｜「デザインの現場」1998.2
KIVA［千葉］
「文化」1985.8／1987.12／1993.3｜『近代の見なおし ポストモダンの建築1960−1986』［朝日新聞社／1986］｜「AJ」1989.6｜「リビング・ナウ（日本放送出版協会）」1991.9｜「SD」1998.1
小笠原支庁舎［東京］
明方村大谷森林キャンプ村宿泊棟計画［岐阜］
大口公園［神奈川］
＊小岩井農場環境計画基本構想［岩手］
＊冬山河風景区開発計画［台湾］
藤沢市民会館コンペ参加［神奈川］
1987 磯子アヴェニュー［神奈川］
阿部邸［東京］
東松院観音堂［福島］
国営昭和記念公園子供の森インフォメーションセンター［東京］
◎国営昭和記念公園大洞窟実施設計［東京］
＊宜蘭県政中心全体計画［台湾］
世田谷バス停［東京］
1988 常滑トイレットパーク［愛知］
「文化」1989.11｜「景観材料」No.13,1997
東京多摩学園［東京］
「文化」1992.9｜「FRONT」1993.3
宜蘭県冬山河修景計画［台湾］
1989 港北ニュータウン公園プール・管理棟［神奈川］
国営みちのく杜の湖畔公園インフォメーションセンター［宮城］
◎ラポロ留真温泉計画［北海道］
1990 カーン庭園〈Jardin Japonais du Jardin Albert Kahn〉［フランス］
「日経アーキ」1994.9.19（増刊）
墨田区生涯学習センターコンペ参加［東京］
＊澎湖島総合計画プロポーザル参加［台湾］
＊ポストンチルドレンズミュージアムプロポーザル参加［アメリカ］
1991 熊本県立球磨工業高校［熊本］
「日経アーキ」1991.8.5｜「室内」1992.11｜「木の空間（新建築臨時増刊）」1992.12
由布院美術館［大分］
「新建」1992.9｜「木の空間（新建築臨時増刊）」1992.12｜『現代建築集成1―文化施設』［メイセイ出版／1993］｜『びあ日本の美術館』［びあ／1995］｜『建築計画・設計シリーズ18―美術館』1997
TATA［静岡］
「文化」1993.3
1992 牧丘町オーチャードヴィレッジ・フフ［山梨］
「商店建築」1993.2｜「文化」1993.7｜「ザ・デザインホテル（別冊商店建築77）」1995.9｜「新建」1996.12
ドーモ・キニャーナ［兵庫］
「文化」1993.3
＊宜蘭県政中心地区都市計画［台湾］
日本女子大付属豊明小学校コンペ参加［東京］
1993 能都町縄文真脇温泉［石川］
「文化」1993.7｜「人にやさしい木の施設―木造事例集その8」［木材需要拡大中央協議会／1994］｜「建築設計資料82―温泉・クアハウス2」2001｜「Casa BRUTUS」2007.3
草津温泉白旗の湯［群馬］
古九谷の社親水公園［石川］
＊礁溪温泉溝地区計画［台湾］
泰雅橋景観設計［台湾］
少年ジャンプ・ジャンプマルチワールド展示設計［東京］
「商店建築」1993.10
1994 かんなべ湯の森・ゆところぎ［兵庫］
「at」1994.11｜「コンフォルト」1995.10｜「日経アーキ」1996.2.19｜「新建」1997.3｜「建築設計資料82―温泉・クアハウス2」2001｜「Casa BRUTUS」2007.3
牧丘水辺の散歩道［山梨］
＊草津町個性形成湯畑周辺整備事業［群馬］
冬山河親水公園［台湾］
「at」1989.8｜『冬山河親水公園（建築リフル9）』［TOTO出版／1993］｜「SD」1994.2
レストラン ラカーニャ［東京］
台北国際景観設計展参加［台湾］
1995 北海道ホテル増改築［北海道］
「日経アーキ」1995.11.27／1996.2.19｜「商店建築」1996.1｜『現代建築集成15―宿泊施設』1997｜「コンフォルト」2000.2｜「Casa BRUTUS」2007.3
◎ニ結王公廟基本設計［台湾］
草津湯畑広場［群馬］
1996 牧丘オーチャードヴィレッジ&ガーデン［山梨］
森の交流館［北海道］
白州尾白の森名水公園・森のイベント広場［山梨］
宜蘭県記念碑［台湾］
1997 十勝ビール［北海道］
「日経デザイン」1997.8｜「コンフォルト」2000.2
宜蘭県庁舎［台湾］
韮山時代劇場［静岡］
＊基隆市情人湖総合計画［台湾］
蘭陽渓河浜公園［台湾］
1998 高橋建設［北海道］
「日経アーキ」1999.11.29｜「コンフォルト」2000.2｜「庭」2005.11
矢野南小学校［広島］
「新建」1999.7｜「教育と施設」No.66,1999｜「LANDSCAPE DESIGN」1999.10｜「School Amenity」1999.11｜「建築設計資料85―屋上緑化・壁面緑化」2002｜「公共建築」2003.1
特別養護老人ホーム 清遊の家［東京］
「at」1991.1｜「日経アーキ」1998.10.19｜「建築設計資料71―特別養護老人ホーム」1999｜「コンフォルト」1999.1｜「教育と施設」No.66,1999｜「ディテール」2000秋
直入温泉療養文化館・御前湯［大分］
「Casa BRUTUS」2007.3
北海道立釧路芸術館［北海道］
太田邸［東京］
由布院美術館増改築［大分］
＊舊社小学校計画［台湾］
宜蘭県政中心地区景観設計［台湾］
1999 林邸ゲストハウス［北海道］
すとう病院増改築［北海道］
宜蘭県県政中心 中央公園［台湾］
青森市芸術創作工房コンペ参加［青森］
2000 万年地域会館［北海道］
新得診療所［北海道］
龍潭郷運動公園［台湾］
ウェットランド動物園国際コンペ参加［マレーシア］
2001 十勝エコロジーパーク・プロジェクトハウス／ビジターセンター基本設計［北海道］
特別養護老人ホーム 親の家［東京］
「日経アーキ」2002.5.13
ドーモ・タベンサ［東京］
北海道ホテル増改築［北海道］
横井邸［北海道］
丹後宇川温泉・よし野の里［京都］
「JA」No.65,2007春｜「Casa BRUTUS」2007.3
石川県九谷焼美術館［石川］
『建築設計資料102―美術館3』2005
進修館塗装直し［埼玉］
宮代町サイン計画［埼玉］
うららく保育園子育て相談室［東京］
「LIVING DESIGN」1999.4−5
多治見中学校［岐阜］
「日経アーキ」2001.11.26｜「近代建築」2002.7｜「文教施設」No.7,2002夏｜「LANDSCAPE DESIGN」2004.4｜「建築設計資料105―学校3」2006
ひかり保育所［北海道］
宜蘭県議場［台湾］
宜蘭県史館［台湾］
中科小学校［台湾］
「BIO-City」No.31,2005.7
土牛小学校第1期［台湾］
水尾小学校［台湾］
「BIO-City」No.31,2005.7
龍潭大池管理中心［台湾］
フランス国立バール樹木園［フランス］
2002 大坪邸［北海道］
松山邸［北海道］
十勝千年の森ランランファーム［北海道］
橋本邸［東京］
2003 ドーモ・タターラ［東京］
2004 十勝川第一ホテル別館・三余庵［北海道］
「商店建築」2004.6｜「東京カレンダー」2006.12｜「Precious」2006.12｜「Casa BRUTUS」2007.3
共働学舎新得農場農業畜産交流施設ミンタル［北海道］
渡辺邸［東京］
音更町立下士幌小学校［北海道］
札幌M邸&FC［北海道］
坂井邸［東京］
エステクラブ・アンジュ［北海道］
＊台南県景観マスタープラン［台湾］
將軍漁港卸売りセンター［台湾］
宜蘭県知事官邸［台湾］
府中市立統合小中学校コンペ参加［東京］
2005 ケアハウス幸房の家［東京］
なごやか亭 柏林台店［北海道］
ホテル四季彩改修［栃木］
関子嶺風景区マスタープランおよび施設設計［台湾］
女たちの戦争と平和資料館［東京］
宜蘭県知事官邸内装［台湾］
宜蘭県庁舎改修［台湾］
礁溪湯圍溝公園［台湾］
山本邸［北海道］
2006 青梅O邸［東京］
目黒K邸改修［東京］
＊清水地熱―地熱発電および多目的利用計画［台湾］
林邸［北海道］
スパークル［岐阜］
十勝川第一ホテルレストラン木もれび［北海道］
帯広H邸改修［北海道］
＊台南県農村景観マスタープラン［台湾］
札幌Y邸改修［北海道］
官田郷葫蘆埤産直センターおよび周辺景観整備［台湾］
飛驒市立図書館複合施設コンペ参加［岐阜］
2007 豊原市葫蘆墩公園一期［台湾］
バオバブ保育園増築［東京］
コトコトハウス［北海道］
「Replan北海道」2007.12.20
上野動物園バードソング［東京］
川崎K邸［神奈川］
天神保育園［長崎］
「これからの学校 2008（日経アーキテクチュア特別編集版）」2008.5.26
廣本邸［北海道］
官田郷葫蘆埤ランドスケープ北埤湖中島石碑園區［台湾］
豊原市葫蘆墩公園二期［台湾］
＊南科液晶テレビおよび産業支援工業區エコレクリエーションランドスケープマスタープラン［台湾］
熊谷邸［茨城］
帯広ドクタータウンI期［北海道］
若原邸［北海道］
和光保育園外WC［千葉］
山田邸［北海道］
＊江別駅前再開発事業［北海道］
岐阜O邸［岐阜］
2008 カメリアハウス［東京］
帯広ドクタータウンII期［北海道］
札幌Sハウス［北海道］
居酒屋徹心改修［北海道］
桃園県八徳周辺水と緑のネットワーク工程［台湾］
八徳市エコロジーパーク新設［台湾］
◎朝里川温泉［北海道］
礁溪温泉公園第一期［台湾］
台東美術館［台湾］
杏園堂鍼灸院［北海道］
スキップ広場・進修館広場［埼玉］
学校法人景盛学園宮ノ丘幼稚園［北海道］
グループホーム「光の家族」［北海道］
月津港風華再現〈水池空間と其の周辺〉マスタープラン［台湾］
丸信アパート［北海道］
はり・きゅうサロンM改修［北海道］
2009 宜蘭県議会増設［台湾］
満寿屋 麦音店［北海道］
礁溪温泉公園第二期［台湾］
ひびき野モデルハウス［北海道］
津山洋学資料館［岡山］
「建築技術」2010.4
礁溪温泉広場緑化［台湾］
雨煙別小学校リノベーション［北海道］
帯広市南町宅地開発プロジェクト「ガーデンタウンつくし野」［北海道］
台東県私立均一小中学校［台湾］
礁溪温泉公園第三期［台湾］
下川町21世紀環境共生型モデル住宅コンペ参加［北海道］
サッチーハウス［東京］
北投磺埤溪嶺温泉源地質保育整備［台湾］
帯広T邸［北海道］
2010 桜新町2丁目ウレシバモシリ市民緑地［東京］
清水地熱地熱広場［台湾］
グループホームひびき野［北海道］
特別養護老人ホームとよころ荘コンペ参加［北海道］
＊廣福村農村再生計画［台湾］
＊樹林村農村再生計画［台湾］
湯圍溝公園温泉源ランドスケープ整備［台湾］
とかちむら［北海道］
鎌倉の家改修［神奈川］
万年消防会館［北海道］
更別S邸［北海道］
＊港邊村農村再生計画［台湾］
礁溪温泉街リノベーション―徳陽路第一期［台湾］
OKグループゲストハウス改修［北海道］
台南県塩水小学校［台湾］
進行中 ひらお保育園［東京］
鶴巻工芸［神奈川］
冬山河森林公園第一期入口管理棟新建工程［台湾］
布袋湿地公園第一期工程［台湾］
八徳市大竹池公園周邊環境ランドスケープ改善計画［台湾］
羅東バスターミナル［台湾］

主な受賞

1977 芸術選奨文部大臣新人賞（美術部門）｜今帰仁村中央公民館
都市計画学会石川賞｜沖縄における一連の都市計画
1979 名護市庁舎公開設計競技最優秀賞｜名護市庁舎
1982 日本建築学会賞｜名護市庁舎
第1回蕾賞銀賞｜労働福祉事業団山口保養所錦グリーンパレス
1987 第5回蕾賞金賞｜安佐町農協生活文化会館
1990 第1回日本デザイン賞大賞｜ドーモ・チャンプルー
横浜市街並み景観賞｜磯子アベニュー
1991 RACコンテスト'91C部門グランプリ｜みちのく杜の湖畔公園インフォメーションセンター
台湾カマラン奨｜冬山河風景区親水公園における価値観と仕事上の態度
「生活都心」たちかわ市デザイン賞市長賞―土木・建築部門｜昭和記念公園こどもの国インフォメーションセンター
1994 第1回石川県景観賞大賞｜能都町縄文真脇温泉
ドイツ Frankfurter Zwilling 賞（フランクフルトThema Domusより）
北海道立釧路芸術館公開設計競技最優秀賞｜釧路芸術館
石川県丸谷焼美術館公開設計競技最優秀賞｜丸谷焼美術館
1996 フランス バール樹木園指名設計競技最優秀賞｜バール樹木園
1997 第5回全税共地域文化賞｜地域における芸術文化の振興に資する活動
1998 多治見市立多治見中学校指名設計競技最優秀賞｜多治見中学校
広島街づくりデザイン賞大賞｜矢野南小学校
2000 台湾「第1回公共工程品質賞」金賞｜宜蘭県議場
釧路市都市景観賞受賞｜釧路芸術館
台湾「遠東建築賞」教育理念賞｜土牛小学校
台湾「遠東建築賞」社区参加賞｜中科小学校
2001 台湾「第2回公共工程品質賞」金賞｜土牛小学校
2002 文部科学大臣奨励賞｜多治見中学校
静岡県都市景観賞優秀賞｜韮山時代劇場
第8回公共建築賞優秀賞受賞｜矢野南小学校
台湾「遠東建築賞」2位｜水尾小学校
台湾「遠東建築賞」佳作｜中科小学校
台湾台南將軍漁港魚貨中心公開設計競技最優秀賞｜將軍漁港卸売りセンター
医療福祉建築賞2002｜特別養護老人ホーム 親の家
2003 北海道赤レンガ建築奨励賞｜高橋建設
エコビルド賞｜高橋建設
台湾「第1回優良エコ建築設計」賞献賞｜宜蘭県政府庁舎改修
台湾台東美術館公開設計競技最優秀賞｜台東美術館
2004 第10回石川県景観賞｜石川県丸谷焼美術館
2008 第8回日本建築家協会25年賞｜進修館
2009 台湾「国家卓越建設賞」環境優良文化賞｜八徳市エコロジーパーク新設
台湾「国家卓越建設賞」環境優良文化類受賞｜月津港風華再現（水池空間と其の周辺）マスタープラン
第12回グッドペインティングカラー特別賞｜雨煙別小学校リノベーション
「第3回いってみたい商店街&お店 北海道」お店部門大賞｜満寿屋 麦音
帯広市まちづくりデザイン賞まち創り部門｜満寿屋 麦音
2010 日本建築家協会（JIA）中国建築大賞大賞｜津山洋学資料館
台湾「第2回桃園都市とまちの景観大賞」｜八徳市エコロジーパーク新設

主な著書

［書名／出版社／出版年］

- 「SD」｜鹿島出版会｜1985.11
- 『象設計集団（現代の建築家）』｜SD編集部編｜鹿島出版会｜1987
- 「建築文化」｜彰国社｜1993.10
- 『空間に恋して―象設計集団のいろはカルタ』｜工作舎｜2004

主な論文・記事

［タイトル／掲載紙／掲載年］

- 特集II：住宅のディテール―自然を呼吸する開口部｜「ディテール」1975夏
- 特集：象グループ・沖縄の仕事〈1971−1977〉｜「文化」1977.11
- 特集：10 QUESTION to 8 ARCHITECTS｜「ja」1978.6
- 特集：象のA~Z｜「流行通信」1979.4
- 座談会：吉阪隆正｜戸沼幸市×大竹十一×地井昭夫×石山修武×樋口裕康×富田玲子｜「文化」1981.5
- 問題はエネルギーの節約ではなく…｜富田玲子｜「建築雑誌」1982.3
- 様式は、形態ではなく素材で｜「2001年の様式（新建築臨時増刊）」1985.7
- 建築家15人のヴィジュアル・メッセージ―住居2010年への予告｜「文化」1985.12
- 街をデザインする｜町山一郎｜「WACOA」No.8,1987
- インタビュー：建築家の肖像V―象設計集団｜町山一郎｜「ウッディライフ」1989.3
- 対談：太田省吾vs樋口裕康｜「ぐっどりびんぐ」1989.5（増刊）
- インタビュー：建築家の自画像｜富田玲子｜「太陽」1990.8
- インタビュー：東京を後に十勝の原野へ 自然と建築の関わりを追究｜樋口裕康｜「日経アーキ」1990.9.3
- 名護市庁舎：第9回 都市再生に向けて建築家は何ができるか―東京の公共建築は地下式にして上はすべて原っぱにしてしまえ｜樋口裕康｜「BE-PAL」1990.12
- 現代建築家の正しいあり方を探る 大陸的痛快トーク「ここはどこ?」｜樋口裕康｜「at」1991.2
- 対談：風の視線 僕らは風使い｜町山一郎×鈴木尚和｜「GLASS&ARCHITECTURE」1991.12
- インタビュー：建築家に問う、建築家にとっての写真｜樋口裕康｜「デザインの現場」1992.2
- 対談：土とくらし｜久住章×樋口裕康｜「文化」1993.3
- 特集：小さな公共建築／対談：場所の発見｜樋口裕康×三宅理一｜「文化」1993.7
- 特集：親水遊戯／'94夏―象設計集団・水のアンソロジー｜「at」1994.11
- インタビュー：Let'sWork 第4回「象設計集団」｜町山一郎｜「AXIS」No.59,1996
- 北海道に居て作品をつくる―遊びとしての建築｜町山一郎｜「建築雑誌」1996.2
- 対談：「多孔質」が建築や街を変える｜富田玲子×岩村和夫｜「景観材料」No.11,1996
- 集団Iターンした建築家たち｜樋口裕康｜「週刊ダイヤモンド」1997.3
- シンポジウム：環境共生の時代―景観材料はどう街を変えられるか｜町山一郎｜「景観材料」No.12,1997
- 風土の復権｜樋口裕康｜「建築士」1998.6
- 特集：象設計集団・北海道十勝の仕事―闇に身をゆだねる。色は闇から染み出る。｜「コンフォルト」2000.2
- 来る世紀に残したいもの、残したくないものカタログ｜富田玲子｜「建築雑誌」2001.1
- インタビュー：日本で唯一、サッカー場がある設計事務所 北海道・十勝でボールと建築を追う象設計集団の活動｜町山一郎・岩田英来｜「A activity」No.12,2001.7
- 特集：サステナブルな災害復興デザイン｜「BIO-City」No.31,2005.7
- インタビュー：名湯建築家、象さんに聞く よい温泉のつくり方｜「Casa BRUTUS」2007.3
- インタビュー：「左官的手法」のとりえ方｜樋口裕康｜「iA interior／ARCHITECTURE 11」2008.11

掲載誌凡例
「文化」→建築文化　「新建」→新建築
「日経アーキ」→日経アーキテクチュア　「JA」→THE JAPAN ARCHITECT
「AJ」→THE ARCHITECTS' JOURNAL（イギリス）